

高倉徳太郎著

カルヴァン

特 241

194

改革社

3

19

6
7
8
9
18
30
1
2
3
4
5
6
7
8
9
18
4

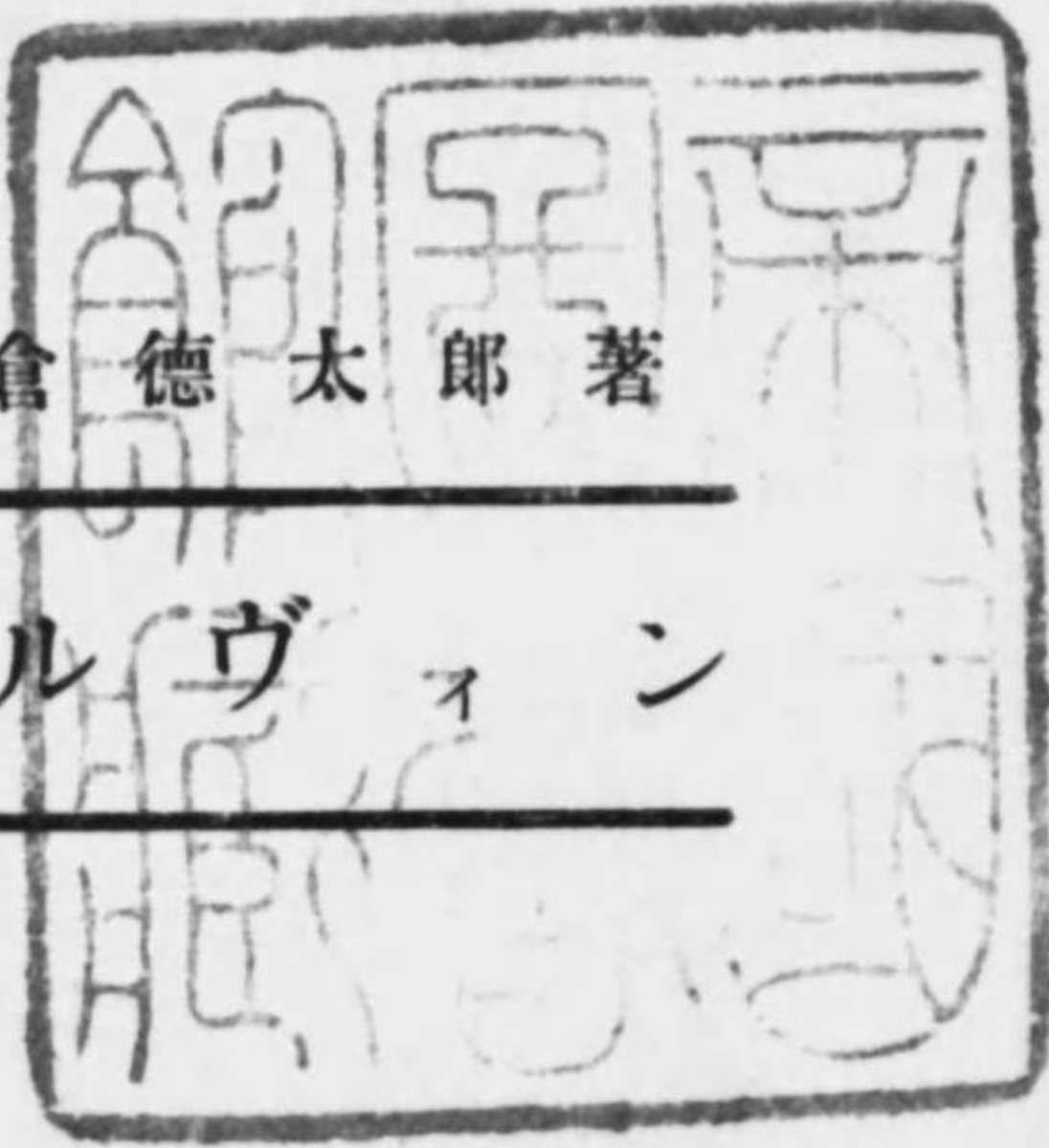
始



特241
194

高倉徳太郎著

カルヴォン



改革社



本篇は岩波書店「世界思潮」第七卷に藏められしもの。今回店主の厚意により、日本基督教會飯田教會々堂建築資金に當てるため單行本として發行するを得しものである。

記して感謝の意を表す。

一九三二、四、一二

カルヴァイン



しがき

高倉徳太郎

第十六世紀の宗教改革以來プロテスタント教會の中には、二つの大なる潮流が出来た。一つは宗教改革の中心人物ルターより發したルター教會であり、主として獨逸丁抹スカンディナヴィア半島に行渡り、他はツキングリーに發しカルヴァインによつて基礎を與へられた改革教會であつて、佛國の一部和蘭蘇國米大陸に及んだ。そしてカルヴァイン主義は改革教會の嚴肅なる敬虔、その教理、教會觀念及びその訓練の形成に最も力あつたのみならず、また明確なる人生觀世界觀を與へて特色ある基督教文明の建設にも貢獻したのである。

カルヴィンは宗教改革の第二期に屬し、彼は年代的にも、神學的にも、初代の改革者の後繼者と見るべきである。彼はルターやツィングリーより二十五六歳若く、メラクソンよりも十二歳若かつた。

彼は佛人であるが、同國人にして宗教改革の先覺者としては、人文學者にして聖書研究に力を盡したルフェーヴルがあり、またモオの監督であつて改革者等を庇護したが後ソルボンヌ神學院の強硬なる反對にあつて彼等を捨てたブリコネエなどがある。殊にファーレルは熱烈なる改革的精神に燃え、カルヴィンの先輩としてまた親友として終生交を更へなかつた。カルヴィンの活動の大部分は佛王フランシス一世の治世に當つてゐる。此王は自國を歐州第一の國となさんと野心に燃え、内治外交軍事に非凡なる力を發揮した。彼は學問藝術を愛したけれども、倫理的誠實に乏しく、宗教的敬虔はこれを缺いてゐたといつてもよい。ために彼は全歐洲を震駭しつゝあつた宗教改革の根本意義を全く把握することが出來ず、カトリックとプロテスタントに對する彼の態度は無定見を暴露してゐる。しかし佛王は當時熾になりつゝあつた人文學者を庇護し、殊に彼

の姉妹ナヴァールのアルガレットは此の新しき學者等に多大の興味を感じ、引いては佛國に於けるプロテスタントを陰に援けた。新興の人文學者及びプロテスタントの運動に強く反對したのは巴里のソルボンヌ神學院を中心としたる保守的精神であつた。人文學者の研究や、プロテスタントの信仰はカトリック教會の基礎を危くするものとして、佛國內に於ても彼等に對する迫害は絶えなかつた。始めて殉教したのはバヴァンヌやベルクインであつた。かく同國內に於ても宗教改革の氣運は起りつゝあつたけれども、未だ分散した諸力を糾合し、之に統一を與ふる指導者を缺いてゐた。佛國のプロテスタントは宗教改革の精神に自國的表現を與へ、新しき教會組織を創意し得る中心人物を求めてゐた。かゝる深い要求に應ぜんためにカルヴィンは出現したのである。

二 出生より佛國退去まで

ジョン・カルヴィンは佛國ピカルディ州のノヨンと云ふ巴里の北東七十哩にある小市に生れた。時は一五〇九年七月十日。彼は一五六四年に死んでゐるから、彼の一生は、我が足利時代の

末期に當つてゐる。父ゼラールは有能な法律家であつて、ノヨンの監督の法律顧問となつてゐた。母フランはカトリックの敬虔な婦人であつて、子供の成長する前に死んだ。カルヴィンには兄弟五人、姉妹二人あつたが、上の二人の兄は夭死した。彼は元來自己につきて語ることを好まなかつたから、その幼時を明細に知ることは出来ない。父は恫瀆なりしジョンの教育に熱心であつて、初め彼を宗教家としたいと願つてゐたやうである。カルヴィンは生來恥かしがりであつたから、一般學生とは交らず、少數の優れた友を有つてゐた。十四歳にして巴里に遊學し、始めはマルシュ高等學院、後にモンテージュ高等學院に入學した。彼が後者を去るとすぐ後に其處にジュスイットの創設者ロヨラが入つて來たのは奇縁といふべきである。此頃の彼の學生生活は宗教的にも道徳的にも最も厳格な規律あるものであつた。彼の巴里遊學中獨逸の宗教改革の事情がよく報導せられ、ルターの著述は新氣運に動かされつゝある一部の學者の間に研究されてゐたことと思はれる。彼が巴里で學業を卒る頃、父は教會の財産管理に關し、教職會と衝突して、破門せられた。父は此頃カルヴィンに神學研究を思ひ止まらせて、法律家とせんためにオルレアン大學に遊學さ

せた、時に十九歳。先のモンテージュ學院が宗教的で禁慾的訓練に行届いてゐたのに對し、こゝの大學の空氣は自由で文化的で研究には便であつた。併し彼の生活はこゝでも規律正しく、禁慾的で、猛烈な勉強をなし、後年の消化不良の種を播いたのである。こゝで伊太利の有名なる法學者アルキアティの教を受けた。後彼はブウルジュ大學に移り、法律研究を續くと共に、ウールマールに教を受けた。彼は獨逸人で人文學者としての教養あり、ルターの信仰にも共鳴してゐた。カルヴィンは彼より希臘語を學び、獨逸の改革者の書をも紹介せられたと思はれる。彼が後に出したコリント後書註解をウールマールに獻じてゐるのを見ても、此師に負ふところ大なるものあつたことがわかる。カルヴィンの後繼者となつたベザも十二歳の少年としてウールマールの許にあつたのである。彼が以上の兩大學に在學中宗教改革者の思想に觸れる機會はあつたであらう。併し彼が此等の大學に於て主として研究に力を注いだのは神學でなくして法律であつた。十二歳の時、彼の父は教會との關係斷えたるまゝに死んだ。父の死によつて彼は、法律研究を彼に強ゐた父の壓力から解放せられて、希臘羅典のクラシックスの研究に没頭せんため巴里に出た。

こゝで佛王の庇護の下にあつた『國王講座』に熱心に出席し、傍ら希臘語希伯來語研究に専心した。此等の研究が果を結んで彼はセネカの寛容論 (De Clementia) の註解を著した。之は彼の處女作、歳二十一三。本書は彼が如何に希臘羅典のクラシックスに精通してゐたかを示すものである。彼は本書に於て羅典の著者より百五十五個所、希臘の著者より二十二個所引用してゐる。之に對し聖書からの引用は三回にすぎない。本書は非凡なる青年學徒としての彼の前途を示すものであるが、彼が神學研究に未だ興味を有つてゐなかつたことを證する。彼はまだ此頃、そのライフ・ワークを見出して居なかつたのである。

カルヴァンは元來自己の靈的經驗の過程について語つたことは殆どないから、彼が如何にしてプロテスタントの信仰を把握するに到つたかを知るのは頗る困難である。併し彼は一五五七年に出した詩篇註解の序文に於て彼の回心に言及してゐる。『神はその神秘なる攝理によつて他の方向に私を轉ぜしめた。そして私は深い泥濘から引出されるのが困難な程、法王教に溺れてゐたのに、神は突然なる回心によつて、年齢に比してはあまりに囚はれてゐた私の心を碎いて従順なら

しめたまうた。かくして私は眞の敬虔につきての體驗と知識とを受けたから、その敬虔より益を得たいといふ大なる願望に燃されて、他の諸研究を全く無視はしなかつたけれど、此等に對して前よりも無頓着になつた。……私自身としては隱家を求め、どうかして人々から避けたいと思つた。なぜかと云ふに私は性來恥かしがりであり、臆病であつて、常に靜寂を愛したからである。然も願は容れられないで、隱退の場所が私にとつては公の學校となつたのである。』またカルヴァンは一五三九年に『カルディナル・サドレトへの答辯』なる文章を認めたが、その中に彼の宗教的經驗を暗示してゐるところがある。『汝(神)の御言によつて燃やさるゝのでなければ、我等の魂を人生に於て導き得るいかなる光もあり得ないことを私は汝の口より聽いた。……汝の御言の代りに、人間の頭腦から生じた教理を教會に導き入れることは瀆神的事であることを汝からきいた。オ！主よ私が汝の誠を知り得るために汝の御靈によつて私を照し給へ。』此等の言によつてカルヴァンの回心は神の直接なるはたらきであつたことはわかるが、その回心のためにどんな準備がなされたか。先には彼の父と長兄とが郷里に於ける教會と不和となり、殊に父が破門せ

れて死んだことなどが、彼の教會に對する考に影響を與へたと思はれる。また彼はウォルマールによつて宗教改革者の思想にふれ、師によつて新約聖書の原本に親むことが出来た。また巴里滞在中有力なるプロテスタントの出入したフォーシ家に親んだことなどが彼をプロテスタントたらしむるに何等かの影響を與へたことであらう。しかしカルヴィンの回心は何時であつたか、またそれが漸次的であつたか、急激であつたかを明かに決定することは困難である。彼の回心は直接に神のわざであるとするも、彼は神の聲を教會に於てなく、聖書に於ける神の言をとほして聽いた。神は御言によつて直接に彼の魂をとらへ、之を回心せしめたまうたのである。カルヴィン研究者の大體一致した見解によれば彼の回心は一五三二年から一五三三年の始めの間である。

カルヴィンがプロテスタントの信仰を宣言すべきときが來た。それは彼の友ニコラス・コップが巴里大學の學長として一五三三年にした就任演説についてである。此演説の草稿はカルヴィン自身がものしたか、または彼の助力によつて出来たものであつた。その内容がプロテスタント的な福音の眞理を大膽に發表したものであつたから、大なる物議を起し、とくにソルボンヌ神學院

は極力反對した。議會はつひにコップを異端として弾劾し、ために彼は瑞西のバーゼルに避難するに到つた。此友の演説に關係のあつたカルヴィンもまた迫害をさけて假名の下に放浪者とならなければならなかつた。彼は此間に人文學者にして改革者なるルフェーヴルを巴里南方のアングレームに訪ねたことがある。此都はナヴァール州の首府であつて、彼の晩年まで親交をつけたマルガレットの宮廷があつた。また彼は此頃少くとも二回郷里ノヨンに旅して、其處の大會堂の説教者たる名義を辭した。之によつて彼は形式的にもカトリックと絶縁したわけである。これから榮譽と安全と便宜のある地位を捨て、貧窮と迫害との生涯に甘んぜんと決心したのである。故郷で短期間二回獄に投ぜられたが今はその理由は明かでない。此頃彼は活動的な改革者としてでなく、靜かなる研究者としての生活に身を委ねんとしたやうである。アングレームに滞在して、其處の完備せる圖書館を利用して研究に沈湎した。『魂の睡』(Psychopanychia)を著し死後最後の審判まで人の魂は無感覺の状態にあると主張するアナバプチストの説を駁撃した。本書に於ては彼はもはや人文學者でなく、プロテスタントの學徒なることを示してゐる。ポアチエ

一といふ町にはプロテスタントの有力なる人士が集つてゐたが、カルヴィンはその町の郊外の洞窟に於て同信の友と共に、最も單純な聖書的な仕方であつた晩餐式を遵り、カトリックの彌撒を公然排斥した。彼は此式を司どつたのであるが、彼はカトリックによつて嘗て按手せられず、またプロテスタントの按手によつて教職となつたのでもなかつた。彼は神より直接に教職への召命が與へられたものと信じて、プロテスタントの教職となつたのである。

三 パーゼル、ゼネヴァ及びストラスブルグ時代

佛國に於てプロテスタントに對する迫害が甚しくなつて來たからカルヴィンはその友ティレーと共にストラスブルグを経てパーゼルに逃れた。時は一五三五年の始であつたらう。當市はエコランバティウスの指導の下に三年前にプロテスタントの信仰を受け入れてゐた。カルヴィンはマルティヌス・ルマニウスの匿名で、少數のプロテスタントと交つた。その中にはツキングリーの後繼者なるプリンガッなどもゐる。こゝで自由に研究し靜に考ふる餘裕を與へられ、オリヴェタ

ンの佛譯聖書に序文を認めた。併しパーゼル滞在中に於ける彼の最も重要な事業は、アングレームに居たときから準備してゐた『基督教綱要』(Christiane Religioninstitutio)の完成と出版である。之は一五三五年八月彼の二十六歳の時完成し、翌年三月に出版せられた。本書はカトリックに對するプロテスタントの教理の系統的敘述であつて、宗教改革の生んだ最も有力なる神學書である。之はプロテスタンティズムのための辯證書であると共に聖書研究のしをりとして彼は本書を著したのである。カルヴィンは本書の始にフランシス一世に宛てた有名なる書翰をのせてゐる。故國に於けるプロテスタントの迫害を故なきものとして佛王に訴へてゐるのである。彼は此書翰に於て王者に對する尊敬をほらひつゝ、實に大膽に所信を披瀝してゐる。神秘家や、狂信者や、殉教者はあつても確信ある指導者を缺いてゐた佛國のプロテスタントの間にありて、彼は優にその地位を満す實力あることを之によつて示したのである。その書翰の一節に於て彼は云ふ。『どうして神の榮光がこの地上にて傷はれずしてあるか、また神の眞理がその尊嚴をたもち得るか、またキリストの王國がどうして我等の中に確實に繼續し得るか、かういふ事こそ陛下よ、

汝の注意と考察と批判とに價するものである。汝が眞の王者であるのは、汝の王國の統治に於て、汝自身を神の役者として認めることにかゝつてゐる。何故なら、神の榮光が政治の目的とせられないところに正しき統治はなく、それは寧ろ寡奪ともいふべきものであるからである。』本書の第一版は組織單純であつて第六章からなり、使徒信經に従つて題目を發展せしめてをる。しかし初版に於てもカルヴィニズムの特色は充分に之を認め得るのであつて、創造者としての神の統治の思想が全體に一貫してゐる。次に高調せられてゐるのはキリストへの信仰による赦罪と悔改とである。神の豫定の思想は救のたしかさの根據として認められてゐるが、初版に於てはまだ永遠の滅亡への豫定の思想は現はれてゐない。カルヴィンは終生本書を補訂して、彼の信仰と神學との全部をこの中に表現しようとなつた。ブルンティールが『インスティテュートは殆どカルヴィンの全部を包んでゐる。彼を識らうとせば、汝はたゞインスティテュートを必要とする』と言つたのは、彼の信仰と神學とに關する限に於ては當つてゐると思ふ。本書の第二版は一五三九年ストラスブルグに於て出版せられて、第一版の第六章が、十七章に擴大せられた。また、その佛語譯はカ

ルヴィン自身によつて一五四一年になされ、佛國語の歴史に一時代を劃したと云はれてゐる。一五五九年にはゼネヴァで改訂第三版が出た、之が現在行はれてゐるインスティテュートの臺本である。本書が如何に大なる貢獻をなしたかにつきリンゼーはかく云つてをる。『インスティテュートが第十六世紀のためになしたところのものは、凡ての人がその前に跪かなければならない神の見えざる統治と權威とを、中世教會の機械主義が肉眼になした如く信仰の眼に見ゆるやうにしたことである。』

カルヴィンはインスティテュートを書き了るとバーゼルを去つて、友人ティレーと共に短時日伊太利旅行をなし、プロテスタントの信仰に理解と同情とを有つてゐたフェルララ公爵夫人ルネエの客となつた。それから彼は巴里を一寸訪ひ、ストラスブルグかバーゼルかに安住の地を見出さんとして戦亂のため迂廻してゼネヴァを通過し、此處に一泊せんとしたのであつた。然るに彼の友ファールレルが之を知つて彼を尋ねた。是より先ファールレルはゼネヴァ市の改革事業に着手して非常なる困難を経験して居たから、カルヴィンの實力を認めて是非こゝに止つて彼の事業に協

力するやう懇願した。併しカルヴィンは今は静かなる境地で讀書と著述に没頭せんと志が固く
なか／＼友の勸に應じなかつたのである。しかもフーレルは熱烈に彼に強要した。

此事情をカルヴィンは詩篇註解の序に述べてゐる。

『フーレルは福音の眞理を促進せしむるために非常な熱心に燃え、私を引き止めようとしてあ
らゆる神経を緊張させた。――懇願では埒らないのを見て彼は私を烈しく呪詛した。斯程まで
助力の必要が切迫してゐるとき之を貸さなければ、神は私の静かな退隱を誚ひ給ふであらうと。
之によつて私は恐怖に打たれて計畫した旅行を放棄した。』神の攝理の手はフーレルをとほし
て彼を固く執へ、遂に彼の後生涯をゼネヴァ市のために獻げつくすに到らしめたのである。

基督教國の諸都市の中でゼネヴァ市ほど複雑多端なる歴史を有つてゐるものは少からう。カル
ヴィンの来る前十年間はことに政治的紛争と宗教的確執とが錯綜して混沌たる有様であつた。健
全なる宗教運動の發展には最も困難なる處であつたのである。ゼネヴァ市は當時約十三萬の人が
あつて、佛人、獨人、伊太利人等の混合からなつてゐた。市民は自由獨立を愛し勇敢であつて、

商才に富んで居つたが、また不道德であつて、賭博飲酒舞踏などを好んだ。同市は第十五、六世
紀頃は伊太利のサヴォイ侯の管轄の下にあつた。また市の宗教家と市民とから選んだ監督も市の
支配權を有つてゐた。その他に市民は獨立して市民總會を組織して市の政治的獨立のために戦つ
た。以上の三の權威は互に争つて來たが、第十五世紀の半、サヴォイ家の一人が當市の監督とな
つて以來、兩者の權力が一致した、之に對して市民は其の自治權を主張して戦ひ續けて來た。市
民の權力は漸次増大し、一五三〇年にはゼネヴァ市は瑞西の他の都市の援助を得てサヴォイ家の
兵力を破り、政治的獨立の基礎を造つた。市政は評議員會又は小議會と二百人議會と市民總會と
によつて行はれていつた。次に瑞西に於ける宗教改革はチューリッヒ、ベルン、バーゼル、ニュー
ンヤテルの順に進み、ゼネヴァでは最後に實現せられたのである。そして同市の宗教改革を促進
するに與つて力のあつたのはフーレルである。彼は小男なりしも雄辯で、熱烈勇敢、妥協の何
たるかを知らない痛快な人物であつた。彼の標語は『我は火を地に投ぜんために來れり。この火
の既に燃えたらんことなり』との聖書の一句であつた。彼はベルンに於て宗教改革に成功し、一

五三二年ゼネヴァにきて以來同市の改革に盡力したのである。之に力を得て同市の改革黨は監督によつて代表せられてゐる勢力と激烈に戦ふた。瑞西の諸市ではその宗教改革は公の討議會によつて決せられたのであるが、カトリックの方からは之に列すべき適當な戦士を見出し得ず、形勢はプロテスタントに有利であつた。それで一五三六年五月十一日にゼネヴァはプロテスタントの信仰に従ふことをその市民總會に於て誓つた。市民は神の言と福音的精神によつて公私の生活要式を整へんと決心した。カトリックの彌撒は當然廢止せられ、之に代ふるに毎日説教がなされた。しかしフーレル等は市民の信仰及びその生活の嚴格なる改善に専心努力したけれども、また之に反對する舊勢力もなかなか根強く、一朝にして抜き去ることは困難であつた。かゝる時に恰もよしカルヴィンがゼネヴァを通過せんとしたのである。

カルヴィンとフーレルとは年齢の差二十なるにもかゝらず、互に信じ、相助けてゼネヴァ改革の事業に當つた。カルヴィンは始めは牧師とならず、『ゼネヴァ教會に於ける聖文學教授』といふ名のもとにパウロの書翰について講議を始めた。ついで彼は教會の組織と政治との改革を

斷行せんとして、まづ聖晚餐式を毎日曜日に通ふこととした。之に列し得るものは教會の首であるキリストの肢たるに相應しき信仰生活をなせるものでなければならぬ、もし之に適はない生活をしてゐるものは、聖晚餐式に列することを拒まれる。此事は當時にあつては重大なる意義を有つてゐた。ゼネヴァ市は全體が一つの教會のやうなものであるから、聖餐を拒まれることは、正しき社交より除外せらるゝこととなるのである。次にカルヴィンは市民の信仰訓練のために、『信仰告白』及び『信仰問答書』を起草した。そして彼は教職（牧師傳道者）と官憲との關係を正しきものにせんと非常に努力した。瑞西の他の州では、官憲の勢力が教職を支配して、後者はいつも前者の下風に立つことを餘儀なくされてゐた。然るに彼は教職の獨立自治を強く主張し、官憲こそ教職の使命のために彼等を援助すべきものとなした。こゝに既に教會と國家とのあるべき關係が暗示せられてゐるのである。かく彼は汲々として改革事業に専心しつゝあつたが、ゼネヴァ市に於ては一方にはまだカトリックの信仰を固守するものがあり、他方では信仰上頗る自由な考を抱くものがあつて、彼等は陰に陽にカルヴィンの事業に反對した。かゝる時しも彼と同國

人にして神學者なるカロリは、カルヴィンがアリアニズムを唱へ、三位一體説を否定する異端であるとして批難した。之に對しカルヴィンは『辯明書』を出して、彼の信仰と神學とが、使徒信經の上に立ち聖書の眞理を根本的に生かすものであることを説明した。彼とフーレルとは異端の批難を免がれたけれども、彼等の立場はだんだん不利となつた。また他方一般市民はカルヴィン等の嚴格なる訓練に懐へずして不満をいだきつゝあり、市の門閥は外來人なるカルヴィン等が勢力を揮ふのを喜ばない。彼等の改革事業は前途幾多の暗礁の横はるを思はしめた。果せるかな一五三八年二月になされし選舉に於てカルヴィン等に反對の議員が大多數を占め、四月には、二百人議會と市民總會とはフーレル及びカルヴィンが三日以内にゼネヴァを立退く可きことを議決した。カルヴィンは此の議會を講壇より『惡魔の議會』と批難してをる。彼は年若く、經驗乏しく、慧さを缺きしため、反對黨の惡感をとくに助長せしめたことはあらう。併し彼がゼネヴァを秩序あり訓練ある模範基督教都市となさんとし、此の目的實現のために神の他何ものをも畏れずして直進せし勇氣と、神の榮光のみ求めてつくせし忠誠とは何人も認めざるを得ないであらう。

フーレルはニュンヤテルに逃れた。カルヴィンはストラスブルグのブッセルから同地の佛國人教會の牧師として赴任せんことを勸めて來た。彼はゼネヴァに於ける苦き經驗から、之に應ずることを躊躇したが、強ゐての招きにより、之を承諾することゝした。ストラスブルグはブッセルを中心として多くの有爲なるプロテスタントの人物が集り、南方獨逸の宗教改革の根據地とも見るべきものであつた。カルヴィンはこゝに三ヶ年滞在し、佛國人のために忠實なる教會をなした。彼は自分の牧する教會を『小さき教會』と稱へて、そのために禮拜要式を考案した。之はルター教會とも、アングリカン教會とも違ふ改革教會獨特の禮拜式の成立に與つて力あるものである。彼はまた一週三回大學に於て講議したほかに、彼の最良の註解書の一つなる羅馬書註解を著し、インスティテュートの改訂第二版を出すことが出來た。彼がカーディナル・サドレトーに對する公開狀を認めたのもこの頃である。之はサドレトーがゼネヴァ市民に對して再び法王に歸順すべきことを勸告したのに對して、確乎たるプロテスタントの信仰の立場から之を駁撃したものであつて、カルヴィンの著せし最良なるものゝ一つと言はれてゐる。彼はまた當時獨逸の諸方に、

開かれた宗教會議に出席して、鋭き直観と強き確信とを以てブッセル、メラクントンの如き調和的なる人々を勵まし力づけた。こゝでメラクントンと會見して以來終生交を持續した。一五四〇年八月カルヴィンはアナバプチストから回心した寡婦プールと結婚したが、彼女は九年間共にありて天に召された。友人への手紙の一節に彼は云ふ、『私は自分の生涯の最良の同伴者を取り去られた。生前彼女はわが聖職の忠實なる援助者であつて、彼女から私は少しのさまたげをも経験しなかつた。』カルヴィンは主義に於て、實際に於て決して禁慾主義者でなかつたが、ストラスブルグ滞在中は最も貧に惱まされ、ゼネヴァに遺した書物を賣り拂つたほどである。しかし彼はこゝで、靜かに研究し、良き友を與へられ、幸福な生活をおくることが出来たのであつた。

四 第二一回ゼネヴァ時代

カルヴィンとフーレルの退去した後のゼネヴァの形勢はだん／＼險惡となつて來た。カトリックは此際にその舊勢力を挽回せんとし、サヴォイ侯は政權を再び握らんとして覗うた。此間に黨

派の軋轢がある。然もかゝる難局に當らんとする勇氣ある愛國者は起らない、そして市民の宗教状態は日に低下しゆく一方であつた。かゝる際市民は嘗て追放せし確信と力量とに満ちたカルヴィンを思ひ出さざるを得なくなつた。そして遂には議會に於てもカルヴィン黨の人々が多數を占めるやうになり、再びカルヴィンをゼネヴァに迎ふることを決議するに到つた。フーレル始め、瑞西の他の教會も彼にゼネヴァへの歸還をしきりに慫慂した。しかし彼は過去の深刻な苦惱を思うてどうしても之に應じようとはしなかつた。彼はゼネヴァへの歸還をたゞ思つてさへ慄へたのである。彼はフーレルへの手紙の一節に、此の十字架を負ふよりも、百度死せんことを願ふとまで云つてゐる。此時躊躇逡巡したカルヴィンの心事ほどバセティックなものはないと思はれる。しかしつひにゼネヴァよりの切なる招きに應ぜんと決心した。始め彼はブッセルが彼と共に行くやうに求めてきかれず、バーゼルとベルンとが彼を援助せんことを求めたが之を得ず、最後に彼は單獨にて最難の改革事業に當らんと決心した。

一五四一年九月十三日三十二歳、カルヴィンは再びゼネヴァの人となつた。一旦聖戰に立つの

決心をすれば彼は何ものをも畏れざる勇氣を有つてゐた。彼は歸るに當つてゼネヴアの教會は嚴格なる訓練を受けざるべからざること、教會追逐の權利は官憲になくして教職の手にあるべきことを主張した。彼の前に横たはつた改革事業は彼の豫期した如く困難で、初めの十四年間は惡戦苦闘の中に過され、後の九年間は彼の勞報いられて勝利の時代となつた。彼はゼネヴアに着するや直に理想とする教會を實現するために、議會に向つて教會法規起草委員を擧げんことを求めた。此の法案は彼の手に成つたもので、多少の曲折はあつたが、二百人議會の協贊を経て法律となつた。これ有名なる *Ornances Ecclesiastiques* であつて、長老教會政治の基礎となつたものである。此の教會法に表れたるカルヴィンの教會政治の理想は、聖書に基づき、第三世紀までの單純なる教會政治に則らんとするにある。彼はどこまでも教會の獨立自治を重んじ、監督を拒み、國家の干渉を排斥した。また教會は教理と信仰生活との訓練を嚴格になすべきものとした。彼によつて平信徒が教會政治に参加し得ることが認められ、形式上では少くとも牧師の選舉權は一般教會員に與へられた。教會の役員は牧師、教師、長老、執事の四つに分れる。牧師は神の言を宣べ傳へ

聖禮典を司どるもの、教師は神學を教へ教職試補を教育するもの、長老及び執事は平信徒であつて、前者は教會の政治を司どり、後者は會計及び慈善の事に當るものとせられた。以上の教會法によりてカルヴィンは或意味で神政政治の理想を實現せんとしたのである。是は教會が國家の事をも支配すると云ふ意味ではなく、教會も國家も共に獨立した權能と機關とを有し、しかも相應じて天地の主なる神の統治意志を各表現すべきものであるとのことである。以上の理想實現のために重要な機關は長老會 (*Consistory*) であつて、牧師五名と、六十人議會及び二百人議會から選出せられた十二名の長老から成立する。毎週一回會合して教會の規律及び一般市民の道德風規を監督して、市民訓練の組織の中樞をなすものである。カルヴィンは未だ長老會の議長となつたことはないけれども、聖書解釋及び其適用の最高權威として實質的には同會の議長と同じであつた。以上の他カルヴィンは、ゼネヴアの新しき教會のために禮拜要式を定め、聖書に基づかない儀式、殊に彌撒の如きものを一切排斥し、之を最も簡單にして莊嚴なるものとした。次にまた彼は小兒のために信仰問答書を作つたが、之は最も簡明に妥當にカルヴィンの特色を言ひ

顯したものである。

カルヴァンは今や己が懐ける聖なる幻を實現せんとして、非凡なる靈的直観と決斷力と組織力とをもつて活動した。彼は説教者、牧師、講演者、また長老會の指導者としてその全生命と精力とを傾倒して戦ひぬいたのである。彼に導かれた長老會は、當時道德風習のいたく弛んでゐたゼネヴァ市民に對して嚴格なピュウリタンの規律生活を要求した。例へば舞踏、奢侈、俗歌、非常に齡違ひの結婚、教職の批判、聖なる名稱の亂用などは嚴禁せられた。如何に峻嚴に規律が實行せられたかは、一五四二年から四年間に死刑に處せられたもの五十八人、追放せられたもの七十人あつたのを見ても明かである。嘗に不規律のみでなく異端も罰せられたのである。例へば舊約の雅歌の靈感を否定したカステリオ、豫定説を批判したボルセク、輕薄なる自由思想家グリューの如きは各罰せられた。以上の如き峻嚴なる政治に對して諸方面から強硬なる反對が起つた。『心靈派』と稱する思想上の自由主義者及び政治上の自由主義者はまづ反對した。またゼネヴァの富者階級を代表するベリンとカルヴァンの味方なるメイグラー等との間に烈しい黨派的争闘が

あつた。カルヴァンは反對者からは綽名をつけられ、彼を罵るために人は犬に彼の名を冠し、彼を嘲る俗歌は諺はれ、彼を誹謗するポスターが諸處に貼られた。元來内氣にして鋭敏なるカルヴァンを此等のことが如何に惱ましたかは察するに餘がある。此頃彼は友ヴァイレに『神もし御手をのべ給はないならば、私は打拉がれるであらう』と訴へてゐる。かゝる苦闘の最中に愛妻は天に召され、彼自身も烈しい神経痛に悩まされた。四十四歳頃のカルヴァンは實にあらゆる方面に於て危機に逼られてゐた。

然もカルヴァンはかゝる戦と不安との中にありながら、汲々として著述を怠らなかつた。インスティテュートの改訂版を二回出し、諸種の小論文を草し、殊にパウロの書翰の殆ど全部と其他の聖書の註解とを著した。カルヴァンは古來の聖書註解者中最大なるものゝ一人であつて、その註解は彼の神學講義より生れたものである。舊約では雅歌及び箴言、新約では黙示録を除いて他の凡ての註解がなされてゐる。その中ことに詩篇と羅馬書の註解とが有名である。彼は從來カトリックでやつて來た聖書の譬喩的解釋を排して、文法的、歴史的解釋を重んじた。聖句解釋に不

明なるところあれば彼は率直にそれを告白してゐる。聖書註解者としての彼のモットーは『透明なる簡潔』であつた。彼の註解は鋭き靈的直観と健全なる實際的判斷に富んでゐる。併し彼は聖書に於ける啓示の發展を認めず、舊約より新約に亘つて變らざる眞理が啓示せられてゐると信じてをつた。神が聖書に於て特別な超自然的啓示を與へ給ふと信じ、その中にある福音の眞理は我等の生來の理性によつては認識し得られず、たゞ上より來る聖靈によつてのみ證しせらるゝものであると主張した。彼はインスティテュートに於て言つてゐる。『聖書はそれ自身のために信ぜらるべきものであつて、論理や理性によつて信ぜらるべきものでない。しかも聖書が我等の中に有する確さは聖靈の證によつて達せられるのである。』

一五五三年夏頃に於けるカルヴィンの立場は先に言つた如く殆ど絶望的に見えた。彼の強く主張する規律と訓練とは諸方よりたえざる反對を受け、また彼の味方や、彼に庇護を求める諸國からのプロテスタントの避難者等は、反對黨に猜忌心をおこさした。かゝる危機よりカルヴィンを救ひ出し、彼に最後の勝利を確保せしめたのは、セルヴェタス（一五一〇—一五五三）の異端

事件であつた。彼は西班牙人、カルヴィンより一歳若く、多方面なる天才であつて、プロレミーの地理學を出版し、また血液循環説なども考へてゐた。當時にあつては過激なる自由思想家であつて、『三位一體説の誤謬』『基督教の回復』などを著した。彼は此等の著書に於て、三位一體、基督の神人兩性、原罪、義とすること、小兒洗禮などの教義を悉く否定した。彼の神學思想は、プロテスタントにとつてもカトリックにとつても極端なる異端であつた。彼は佛國のヴィンヌに長く滞在し、此間にカルヴィンと文通したこともある。此處で彼は異端のゆゑに投獄せられた。彼は獄を脱してナポリへ赴く途中數日ゼネヴァに滞在したが、その潜伏發見せられて禁錮せられた。カルヴィンはフーレルへの手紙に『セルヴェタスがゼネヴァに來たならば、安全にこゝを去らしめないであらう』と言つてゐる。彼は基督教の最も重大なる眞理が否定せらるゝのは、神の榮譽がいたくけがされる事だと確信してゐたのである。セルヴェタスの審問は開かれたが、カルヴィンは彼が死刑に處せらるべきものと信じてゐた。セルヴェタスの事件は黨派的心によつて複雑にせられた。評議員會の議員なるベテリエとかベリンなどは、黨派的感情から猛烈にカルヴ

インに反対した。しかし彼はセルヴェタスの事件が、ゼネヴァに於ける教會政治の危機なることを認めて死力をつくして戦つた。彼は評議員會の前に立つて、『私はベテリエに聖晚餐を分つ前に死せんことを欲する』と言明したほどである。市の議會は、セルヴェタスの事件について瑞西の各州の意見を徴したが、みなカルヴィン等の主張に賛同した。終に一五五三年十月二十七日セルヴェタスは市議會の決議によつて焚殺に處せられた。カルヴィンは焚殺よりも寛かなる處刑の方法をすゝめたけれども用ひられなかつた。セルヴェタスの處刑についてはその當時に於てもカステリオ及び伊太利のプロテスタントの避難者などは反対した。しかし大體に於て當時の基督教國の輿論はセルヴェタスの處刑を是認した。穩健なるメランクトンすらカルヴィン等の處刑を是認したるを思へば、其時代の背景に於てセルヴェタスの事件は考へなければならぬと思ふ。

セルヴェタスの事件はゼネヴァに於ける勢力の權衡を破るものとなつた。これ以來カルヴィンに反対する勢力は急速に衰へ、之に對してゼネヴァに於ける彼の地位は非常に強固になつていつた。かくて教會は國家より獨立して excommunication (教會追逐) の權利を確實に保有すること

となり、教會をとほして市民の訓練は充分に行はるゝやうになつた。カルヴィンは教會の立法者また、組織者として古來最も卓越せる一人であつて、彼は教會を組織して神を禮拜するに相應はしく訓練することに成功した。彼によつて教會の長老政治が創められたのはよく知られてゐることである。

カルヴィンはゼネヴァ市の宗教及び道德方面に力をそゝぎしと共に、産業方面をも閑却せず、同市繁榮の爲め織物業を奨励して大に功を收めた。また彼は通商に關しては自由なる見解を有し、安當なる金利の授受は聖書に禁ぜられずとして之を認めた。たゞ彼の場合では、利子許認の根柢には、人はみな神の榮光のために生くべしといふ禁慾的な生活動機が横たはつてゐることを忘れてはならない。とにかく利子許認が彼と近代資本主義との間に關係ありとせらるゝ理由の一つである。

カルヴィンは眞の信仰は理的でなければならぬとの確信から、宗教と教育との關係の密接なるを痛感して、ゼネヴァ市に有力なる學校を建設せんと豫て志した。漸く一五二九年に宿望を達して、彼は親友にして忠實なる弟子ベザを學長としてアカデミーを創設した。同校は語學、修

辭學、論理學、哲學を教へ、神學は此等の冠とせられた。此のアカデミーに於てゼネヴァの子弟を教育すると共に、同校を全改革派プロテスタント教の神學校となさんとし、彼自身神學の講義をした。彼の死する頃には學生千五百に及び、殊に歐洲諸國の有爲なるプロテスタントが來り學んだ。アカデミー建設はカルヴィンのゼネヴァに於ける事業の冠となつたと云つてよい。要するに彼は同市のために少くとも三つの偉大なる事業をなし遂げたのである。(イ)同市の教會によく訓練せられたる宗教家を與へ、(ロ)市民に正しき教養を與へて、その信仰に理知の根據を與へ、(ハ)市民にさかんなるヘロイックな精神を與へ、該市をして全歐洲の迫害せられたるプロテスタントの城また避所たらしめたのである。今やゼネヴァは全歐洲から理想的なビュウリタンの都市として仰望せられ、一時プロテスタントの代表者及び避難者の一大集會所となつた。ジョン・ノックスは同市についてかく稱贊してゐる、『使徒時代以來地上に嘗てありし最も完全なるキリストの學校である』と。

カルヴィンがゼネヴァに於て爲せしこと悉く正しと云ふを得ないとしても、たゞ神の榮光の爲

にのみ生きんとした私心なき奉仕と、理想を實現せでは止まない熱烈なる努力との前には何人も頭を垂れざるを得ないであらう。ホルが適切に説明したやうに、若しカルヴィンが自己の名譽に汲々たる野心家であつたならば、その生前の事業が如何に人の目を眩惑したとしても、彼の死後に反動があつた筈である。之は歴史上に於て屢々あることである。然るにカルヴィンによつてゼネヴァに基礎を置かれた事業が百五十年間微動だもせずして發展し來つたのは實に驚くべきことである。彼は最も適當なる後繼者を弟子にして親友なるベザに見出した。彼はカルヴィンの神學と訓練とに全く傾倒して、カルヴィンの死後四十年間その遺業の完成に努力した人である。またゼネヴァ市の當局者も今やみなカルヴィンの嘆美者となり、彼に對して心からなる尊敬と親愛とを示すやうになつたのである。

カルヴィンがプロテスタント諸國に及ぼした影響について述べる。彼はゼネヴァ市を基督教都市の模範となし、之を迫害せられたるプロテスタントの避難所となし、また彼等に對する訓練と厚遇とのよく行はるゝ處となすに成功した。彼の視野は遠大であつて、獨逸の改革者等よりもプ

ロテスタント全體の將來についてより多く關心して居たと云つてよい。彼は神學者として、組織者として教會政治家として、獨逸を除いたプロテスタントの諸國に強き感化を與へた。此等諸國の教會はカルヴィンによつて、信條と組織と訓練と殉教的精神とを徹底的に受けたのである。彼が各國各階級の人々と如何に廣汎に亙つて書翰を取交したかを見れば、彼の感化のほどを知ることが出来ると思ふ。彼の通信者の中には神學者牧師は勿論、國王、政治家、貴族、軍人、被迫害者等實に多種多様であつて、彼は此等の人々を慰め勵し、最も正しく慧こき指導を與へたのである。まづゼネヴァ以外に彼の勢力の及んだのは佛國であつた。彼は故國のプロテスタント即ちユウゲノオの前途につき殊に心を用ひ、實質的に彼はその指導者の立場にあつた。一五五九年改革教會の巴里會議に於て採用せられたガリカ信條は、カルヴィンによつて起草せられたのを修正したものである。次にカルヴィンの勢力は和蘭に及び、同國をして歐洲諸國のうち宗教的自由の最も行はれた國とした。同國教會の信仰の基礎となつたベルギック信條も全くカルヴィニスティクなものである。それから蘇國の宗教改革の中心人物であつたジョン・ノックスがカルヴィンの友に

して弟子たりしことは周知の事である。同國の改革教會はカルヴィンの精神に従ひ、教會の獨立自由のために徹底的に戦ひ、同國をして全世界中最もカルヴィン的な精神の行はるところとした。また英國教會の指導者等も當時カルヴィンとの通信によつて、その指導をうけ、同教會の信條である『三十九個條』にはカルヴィンの思想の影響を認めることが出来る。同國に於けるビュウリタンの運動が、カルヴィニズムに負ふところあるは云ふを待たぬ。次に獨逸語を語る瑞西の諸市ベルン、バーゼル、チュウリッヒ等とカルヴィンとの關係は可なり困難であつた。しかし此等の諸市も結局漸次ツキングリーの勢力を脱してカルヴィンの神學と訓練の精神を受け入れるやうになつた。最後にカルヴィンの勢力は、獨逸の諸州ナッサウ、ブレイメン、バーデン、ヘッセン、ブランデンブルグなどに及んだ。有名なる『ハイデルベルグ問答書』の起草者オレヴィアヌスとウルシノスとは熱心なるカルヴィニストであつた。カルヴィニズムはたゞに歐洲諸國に止まらず、信仰自由の天地なる米大陸にも力強く波及したのである。とにかくカルヴィンの感化の下にあつた諸國の教會は、彼によつて信仰と訓練と組織と殉教的精神とを與へられ、内にあつては相互の一致協力

を強められ、外なるカトリック教會に對しては最も勇敢に戦はしめられた。またカルヴィンは意圖的には決して政治的改革者ではなく、彼の關心は主として宗教的方面にあつたが、併し彼の精神が徹するところそこに公民の自由は保證せられ、政治的改革が實現せられていつたのである。カルヴィンはとくに教會と國家との關係を重大視し、兩者はその使命及び機能に於て互に獨立し、相補ひて此の地上に神國を實現すべきものとなした。彼の感化のもとにあつた教會は、國家よりの獨立と自治とのために力をつくして來た。之に對して、ルーテル教會及び英國教會などは、教會を國家に依存せしめ、その組織制度をある程度まで國家の支配の下に置くことを認めたのである。

五 彼の晩年及びその人物

カルヴィンは一五五五年以來順潮であつて、彼の理想をゼネヴァ市に着々と實現することが出來、市民からも心より敬愛せられ、神の言の殆ど誤なき註解者として信頼せられた。彼は市の牧師の一人として、説教者また神學者として實に激務を處理した。隔週に毎日説教をなし、毎週三

回神學講義をなし、教會の長老會には必ず出席して重要協議に参加した。その間に神學的著述をなし、西歐プロテスタントの指導者として各國の人士と通信をする、實に精力絶倫の活動をした。彼は中肯にして瘦身、顔面蒼白、眼光透明、學者的の聰明と豫言者の確信とを合せ備へてゐた。また非凡なる記憶力を有し、一度讀んだことを必要に應じて思ひ出し得た。彼は修飾的な表現を避けて、單刀直入の單純さを以て語り、その明晰にして燃えたる論理は、人を説得しなければ止まない力があつた。學生時代から彼は病身であつて、消化不良と激しき頭痛とに苦しんだ。殊に晩年は神經痛、結砂病、肺病にもかかり、極端なる消化不良のため、一日一食であつた。彼は自分で生來内氣で臆病だと告白してゐるが、神經過敏であつて、積極的な豪放さをもたないが、眞理のため、神の榮光のためには何にも屈せざる勇氣があつた。ルターの如く開放的民衆的でなく、禮容典雅に親みを感じたから、やゝ貴族的な傾があつた。併し彼は決して人間嫌ではない。比較的孤獨であつたのは、精力を出来るだけ集中したいため、また過大なる重荷を負されたが爲め廣く交る餘裕もなかつたのであらう。小數の友、ファーレル、ヴィレー、プリンガー、ベザなどゝ

は實に深い美しい交をなした。彼は多忙裡にありながら友のために自身借家を見つけ、友のために妻を世話したことなどもある。カルヴィンは快活であつたとは云ひ難きも莊嚴なる道德的眞實さに一貫した人であつて、彼の最も憎んだものは、虚偽であり、偽善であつた。フロードはカルヴィニズムに關する講演の中に、『世界に於ける惡徳の半ばは卑怯から生ずる。そして虚偽を畏るゝものは其他何ものをも畏れない』と云つてゐるが、カルヴィンは實に虚偽の他何をも畏れざる良心の人、眞の勇者であつた。次に彼の敬虔の最大特色は神への敬畏である。彼に従へば人は天地の主なる神の前に全く謙虚となり、たゞ神の榮光のためにのみ生くべきであつて、こゝに人生の意義を見出し得るのである。彼いふ『犬さへその主人が襲はれるときには吠える、まして我が主の榮譽が攻撃せらるゝとき黙することが出来ようか。』『唯一の神に榮光あれ』(Soli deo Gloria)之が彼の信仰のモットーであつた。従つて神の榮光と權威とを無視する偶像禮拜は彼の最も忌むところで、凡ての罪の根柢には偶像禮拜が横たはつてゐると見た。此點に於て彼の敬虔は舊約の豫言者のそれに非常に似通うてゐる。彼は虚弱にして、神經過敏であつたにもよるが、彼はしば

しば氣むづかしく短氣となり、之に就ては彼自身も缺點を認めて自分を激しく責めてゐる。彼は自己に對しても、他に對しても求むること嚴にして、殊に反對者に對しては苛酷と思はるゝ態度をとつたこともある。これ等は勿論彼の缺點と見るべきものであるけれども、彼の眞理に對する確信があまりに強く、彼の興かる事業が神の事業なりとの確信があつたことが彼を然らしめたのであると思はなくてはならない。彼は所謂禁慾主義者ではなく、彼の生活は適宜と高雅とを失はなかつた。インステイテュートに於て彼はいふ。『我等は笑ふこと、食事に満足すること、我等自身の所有又は我等の祖先から既に受取つた所有に、新しき所有をつけ加へること、音樂又は酒をたのしむことを少しも禁ぜられない』と。彼はまた自然を愛したが、之を審美的に楽しむよりも、理知的に觀賞し、自然に於ける神の智慧、神の大能をほめたゝへたのである。

一五五八年(四十九歳)の秋以來カルヴィンは激しい心勞と過度の活動とのために、著しく健康を害した。彼はつひに骸骨の如く、影の如くに瘦せて歩行し得ず、人によつて講壇に運ばれるやうになつた。六四年二月には最後の講演と説教とをした。四月にゼネヴァの牧師等が病床を見舞

つたとき、彼はかく語つた。『私は當市に於て驚くべき戦をした。私は或夕戸口に五六十の彈丸に見舞はれ、愚弄せられた。思へ、此事が私の如き臆病なるあはれな學徒を如何に驚かしたかを。其後私は當市を追放せられてストラスブルグに往つた。……私は諸君が忍ばなければならなかつた多くの缺點を有つてゐる。そして私がしたことは少しも價値なきことである。……私の缺點は恒に私に不快を與へた。私は諸君に罪の赦されんことを願ふ。……私のいだしし教理に就ては、神が教ふるやう與へたまうたものを忠實に教へた。私は最も忠實にそれをなした。私は聖書の一章句をも私の知る限りに於ては脱落せしめ、又は其意味を故意に曲げなかつた。私は精巧なる研究によつて多少附會なる意味を見出し得るときでも、その誘惑を退けて恒に單純ならんとした。私は他への憎みからして何ものをも書かない。しかし神の榮光のためと考へたものをつねに私の前に置いた。』此等の言によつても、カルヴィンの謙遜と眞實とたゞ聖旨をのみなさんとする忠誠とを知ることが出来る。彼はニューシャテルから訪ね來た親友フーレルに永別し、五月十九日彼の家で開かれた牧師會に辛じて出席し、それ以來床中にむせぶ

が如く祈りつゞけ、一五六四年五月二十七日の夕、戦多かりし此世を辭したのである。カルヴィンの弟子にして最初の傳記者ベザはいふ『十六年間カルヴィンの生活の觀察者として私は、正當に證明することが出来る。即ち我等は此の人に於て眞の基督者の生涯の最も美しき模範を有つてゐる』と。またカルヴィンと思想傾向の最も距つてゐたと思はるゝルナンは評していふ、『カルヴィンはルターの成功の秘訣の一つである生々とした深い同情ある熱情を缺き、またフランシス・ド・サールのやうな人の心をひきつける惱ましき優しさを缺いてゐたけれども、彼は基督教に對する反動を求むる時代と國とのなかで、よく成功した。その理由は單に彼が彼の時代に於て最良の基督者であつたからである。』

六 彼の思想

神學者としてのカルヴィンが、負ふところの多い古代の神學者はアウグスチンである。之は彼がインスティテュートに於てアウグスチンより最も多く引用してゐるのを見てもわかる。とくに

神観、原罪、豫知豫定の教理を負うてゐると思ふ。また中世末期の神學者スコタスに、よしそれが無意識なるにせよ負うてゐると見るべきである。神を全能なる統治意志と考へる點に於て。カルヴィンがとくにルターに負ふこと大なりしは申すまでもない。彼はルターを信仰上の師父として、宗教改革者の中心人物として尊敬してゐた。神の言としての聖書の見方、信仰によりて義とせらるゝ真理の如きはとくにルターに負へるものである。彼はルターから、彼の信仰と神學の最もよきものをうけ入れたが、然も全體として之を改造し、發展せしめて、自己の刻印をそれに押してゐる。また彼はストラスブルグの改革者ブッセルにも負ふところがある。即ち神の豫定を赦罪の確さの方面から見ないで、神の榮光の顯現として見る點に於て。それでカルヴィンはよしルターの如き創造的精神に富まずとするも、宗教改革のよつて立つ福音的信仰とその真理とを一大系統化したる點に於て實に大なる貢獻をなした。彼は確に基督教史に於ける四五の最大なる神學者の中に數へらるべきものであることは、異論なしと思はれる。彼の神學思想は、彼の聖書註解、信仰問答、信仰告白等、殊にインスティテュートによつて之を明かにすることが出来る。殊

にインスティテュートを知ることには彼の全神學を知ることであるとも云つてよい程である。

カルヴィンはルターの福音的信仰を土臺とし、發足點として彼の信仰及び神學を發展せしめていつた。生來の人は原罪に喰ひ入られて、自分で自分を決して救ひ得ない。たゞ十字架にかゝりしキリストを信する信仰のみが、我等罪人を義とする。しかもかゝる信仰は人の業によつて得らるゝものでなく世の創より神の恩恵によつて豫定せられたもののみ與へらるゝのである。神の豫定はかくして我等の赦罪の客觀的たしかさの根據となるのである。カルヴィンはインスティテュート第一版に於ては、神の豫定をかゝる見方で見えてゐる。然るに彼は救の確さの根據としての豫定の信仰を徹底して、その奥に彼の特色ある神觀をつかみ得た。インスティテュートの第二版に於て既にかゝる思想を發展せしめてゐる。神の豫定は我等罪人に神の奇蹟的恩恵を保證するに止まらず、豫定そのものに於て神は自らの絶對なる統治意志を表明するのである。凡てのものは神によつて成り、神に保持せられ、神に歸すべきものである。神がとくにある罪人を救ふのは、その人の功業によるのではなく、全く神の自由なる恩恵によるのである。ゆゑに人は誰も己が救を

神の前に誇り得ない。また我等罪人が罪のために滅亡しても、之を神に訴ふることは出来ない。救に豫定せらるゝにせよ、滅亡に豫定せらるゝにせよ、神は豫定に於て、神の絶對的に自由なる統治意志を發揮せらるゝ。神の豫定そのものが神の榮光を顯はすこととなるのである。豫定は神の絶對的な自由を最も力強く保證するものである。フォルサイスは神の統治的自由の保證としての豫定の信仰に深き洞察を加へて言つてゐる。『世界に於ける公の自由に關するプロテスタントイズムの最大の力はカルヴァニズムであつた。而してカルヴァニズムの至高の關心は神の自由であつた。その大なる蹟石であつた豫定は凡てのものを神の選擇の自由と恩恵とにまで犠牲にせんとする一つの努力である。この努力は健全であつて、宗教の本質に屬するものである。よし凡ての人は奴隸となつても神は自由でなければならぬ。』然もかく神の自由が確實に保證せられて、實は眞の人間の自由も力強く保證せられて來るのである。要するにカルヴァンはルターの豫定の信仰を取入れ、之を徹底せしめて彼の最も特色ある神觀に到達したのである。

カルヴァニズムの中心はその神觀にありといつてよい。カルヴァンにとつて神は救主であると

ゝもに、特に世界の創造者であり、支配者である。モーゼの十誡、主の祈及び使徒信經に於ける如く、彼にとつて神は第一であり、凡てのものゝ中心であり、何ものよりも確かなる實在、凡てのものに貫き、凡てのものゝ上にある。神は全世界過程の原因でありまたその目標である。神の本質は聖なる全能なる恵ある意志である。神の永遠なる經綸は、被造物の意志によりて妨げられないで必ず實施せらるゝ。カルヴァンのかゝる神觀から、その特色である敬虔がうまれて來る。ルターの敬虔の特色は、キリストに於ける神の赦罪の愛を感得し、之を信じて慰と平和とを經驗するにありとすれば、カルヴァンの敬虔は神の榮光を稱めたゝへ、その聖なる支配を畏れかしこみ、聖き良心を以てたゞ神に仕へんとする嚴肅なる眞劍なる敬虔にその特色ありと云ふべきである。またかゝる神觀から徹底したる神中心の人生觀がうまれてくる。カルヴァンは云ふ、『人は神を知ることを通じて明白なる目的のために生れ、また生活するのである。そして神を知る知識が果を結ぶに到らなければ、その知識は空しく、その思想と行爲とを此の目的に向けない人は存在の法則を完うし得ないのである。』人生の究極の目的は神を知り、神を愛し神に仕ふるにあ

る。神は人のためにあるのでなく、人こそ被造主なる神のためにあるのである。かゝる神観からカルヴィニズムは他の神學者等を悩ました神正論 (Theodicy) の問題を容易に解決する。義にして恵ある神の支配する此の世界に於て何故に幾多の矛盾があるか、罪の爲に永遠の滅亡に到るものがあるか、神は義にして全能なりとするも果して愛なりや。然るにカルヴィンにとつては罪人は神より如何に取扱はるゝとも不満をいだくべきではない、たゞ我等は如何にせらるゝとも、それによつて神の榮光が顯るればよいのである。神は罪人の救に於ても、その滅に於ても聖なる意志を顯したまふ。たゞ聖旨のみ終局に勝利あれ。かゝる點でカルヴィンは最も非感傷的なる信仰を與へる。次にまた聖なる統治意志としての神觀から、カルヴィンの徹底したる客觀主義がうまれる。神は單に救はれたる個々の魂に生きるのみでなく、天地の創造者又支配者なる神は、家庭、研究室、街頭、學校、都會、國家、凡てが神の支配のもとに立つべきである。信仰は信仰、文明は文明と二元的に分るべきものでなく、教育も政治も經濟もみな神國實現の素材たるべきもの、神の聖なる支配によつて潔めらるべきものである。

次に究極の實在、始めにして終なる活ける神は如何にして認識せられるか。カルヴィンに従へば人は本來その心に神の知識を植つけられてゐる。換言すれば人は元來宗教的なもの、神を識り、神と交り、神に絶對的に服従し得るものである。かく創造主なる神を識ることによつて人は自己を眞に認識することが出來、また自己を認識すればするほど神を識ることが出来るのである。併し以上は墮落せざる前、理想的なる人間の狀態であつて、現實の我等人類は悉く罪と肉とに囚はれてゐるから、神を識ることが出來なくなつてゐる。我等はいま良心に於ても自然をとほしても、歴史のうちにも神を認め得なくなつてゐる。こゝに神を認識するとは、たゞ頭腦で理論的に神を思惟することではなく、宗教的に神を認めることである。神を認めるとは神を信じ、之に絶對に服従することに他ならない。かく自然的啓示によつて神を認め得ない我等罪人に、神は聖書を與へ、その中にある超自然的啓示によつて神を認めしむる。聖書に於ける神の啓示は贖罪的なものであつて、我等罪人に信仰を起さしめることによつて、神を正しく認めさすのである。我等は生來の理性によつては決して神を識り得ず、たゞ聖書に於ける神の言の與ふる聖靈によつて、神の實在

とその性質とを確認し得るのである。こゝに神の言と聖靈との必然的關係が存する。インスティテュートにかくある。『神は彼の言に於てのみ自己に對する完全なる證をする。その言が聖靈の内的證明によつて捺印せられたときのみ、神の言はまた人の心に全き信仰をよび起すのである。』それで神は聖書に於ける神の言によつて聖靈を與へ、聖靈自らが我等罪人の心を照して神を認めしめるのである。神認識の秩序からいへば、聖書に於てまづ救主としての神を認識し、此の神を認めて後、創造主としての神をも認め得るのである。恩寵の神が先に體驗せられて、次に自然の神も認識せられる。

次にカルヴィンの贖罪思想。彼に従へば人は生來肉であり、自己中心、傲慢にして神を忘れ己が腹を神とする。不信仰、偶像禮拜、之が人心の真相である。故に人は決して自分で自分を救ひ得ない。ことに我等はキリストの十字架に直面するとき、自らが神の怒の下に立ち、審判と滅亡との運命にあることを痛感する。言ひかへれば神の言としてのキリストによつて初めて我等は眞の自己を認識せしめられるのである。かくキリストの十字架は神の聖なる否定であり、自己の危

機であるが、同時にそれは神の赦罪の恵を我等に與ふるものである。キリストの十字架に於て我等に逼る神は罪人なる我等を鞠くことによつて赦す神である。十字架のみ、原罪即ち被造主と被造者との距離をうづめ、聖なる神を惠ある神として體驗せしめる。キリストに於けるこの贖罪的啓示に答ふるものが信仰である、信仰とは神の聖なる約束に對して然りと答ふることである。かくして信仰は我等のわざでなく、キリストに於ける神自身のわざである。こゝに信仰のたしかさがあるのである。神は世の創の前から我等に信仰を與へんとしたまふ。かくて神の豫定は我等の赦罪のたしかさの根據となる。ルターにとつては神の豫定は主として義とするための豫定であつたが、カルヴィンは之と共に、聖潔への豫定を高調した。神は我等を赦罪にまで豫定するばかりでなく、潔めにまで豫定し、我等をして絶対に神に服従せしめ、その聖なる意志を實現せしむるのである。カルヴィンはいふ、『選の目的は人生の潔めらるゝためであるから、選はその目的を到達するやう我等を目醒し、勵ます筈であつて、決してそれが怠惰への口實となるべきでない。』我等が神から選ばれ救はれたのは、自己の救に安住せんがためではなく神の聖旨を奉じ、その榮光のた

めにのみ生きんためである。選の恵は特権ではなくして責任である。カルヴィニズムほど恩恵を徹底的に倫理化し得る力を有するものはない。そしてカルヴィンの救への選は決して個人主義的なものでなく團體的なものである。神は神の目的に凡てを奉獻せんとする人民、潔められたる團體を得るために選ばれるのである。キリストの十字架は個々の信者のためよりもまづ、選ばれたる團體の爲である。團體的な選の信仰に於てカルヴィンは舊約の豫言者の信仰と相通するものがある。序に言ふ。基督教史に於てカルヴィンほど舊約の偉大なる豫言者の信仰と思想とを徹底して生かした神學者は稀であると思ふ。即ちその莊大なる神觀に於て、豫定と召命との密接なる關係に於て、宗教的一元的世界觀に於て、救の團體的意義に於て、偶像破壊の精神に於て兩者はまことに相應じ相通じてゐるのである。

我等が選び救はれるのは、新に此世に遺されて、神の聖なる意志を實行せんがためである。しかし神の意志はたゞ漠然として與へらるゝものでなく、明かなる内容をもつべき筈である。それで神はその與へ給ふ律法に於て具體的に己が意志を明示せらるゝ。モーゼの十誡や山上の垂訓の

如きは單なる律法でなく、神の聖意の如實なる表現である。ブルンナーの言ふ如く、神の恩恵と律法との關係をよく生かしたところにカルヴィニズムの一大特色があるのである。カルヴィンは神の律法に服従すべきを力説したが、之は單なる誠律主義ではなくして、恩恵によつて贖はれたるものゝ聖なる義務として生ずる生ける律法主義である。またカルヴィンは絶對として認められたるモーゼの十誡と相對的と考へらるゝ自然法とを同一に見なし、一般社會に行はるゝ種々の法規を神の意志に關係せしめんとした。言ひかへれば、教育、政治、經濟の法則をも神の律法によつて統一し倫理化せんとしたのである。こゝに凡てのものを創造主の支配のもとに置かんとする客觀主義、基督教文明を徹底的に建設せざれば止まざるカルヴィンの熱意がうかゞはれる。

選ばれ救はれたるものは神の榮光のため、此世に聖意を實現する爲にのみ生きなければならぬ。選の確信に立つものはもはや救の確さにつきて少しも不安を感じるを要せず、たゞ只管此世に神國を實現するために努力すべきである。こゝにカルヴィンの特色ある禁慾的他界的な生活態度がおこつて来る。これはキリストに於ける赦罪の祝福を享有して、此世に對する無頓着から

來る消極的な他界心でなく、我がために生きず神の榮光の爲にのみ生きんとする神中心の生活態度から來る積極的な他界心である。各自は與へられたる己が地位職業、環境をとほして積極的に神の意志を實現せでは止まざる心より來る他界心、徹底したる召命生活からくる他界心である。キリストの王國實現の爲には此世とその文明とを、主のために征服し、潔め別たなければ止まざる活動主義がこゝにある。カルヴィニズムほど徹底したる労働の倫理を與ふるものはない。また之と關聯してカルヴィニズムの特色ある人格觀が生ずる。選ばれてキリストの十字架の救に與かるものは、その恵に感謝するとともに、創造主にして贖罪主なる神に對し嚴かなる責任を感じ、此世に遣されたるものなるを痛感せざるを得なくなる。こゝでは道德的自律が人格の核心とならずに、神への責任と此世への使命とが、人格の根本となるのである。その人格感情は自己尊敬ではなくて、神に對する謙虚と責任感である。

次にカルヴィンにとり眞の教會とは世の始より神に選ばれたる信者の交即聖なる團體である。キリストは選ばれたる民のために十字架にかゝられた。眞の教會が眞のキリスト教であると言つ

てよいのであつて、教會の他に救はない。然も斯る教會は我等には見えざる教會であつて、神のみ之を知り給ふ。そしてカルヴィンはこの見えざる教會を具體的な組織的な見ゆるものとして實現する爲に力を注いだ。ホルはいふ、『カルヴィンはその追隨者に見ゆる教會と神國との區別を明かにしたのみならず、見ゆる教會は、神がそれによつて神國を實現する爲の缺くべからざる手段なることを明かにした。』見ゆる教會は基督者の母であつて、その唯一の寶は神の言即ち福音である。之によつて教會は我等を生み、育て訓練するのである。そして見ゆる教會の中に偽善者あり、不信者ありとするも、この事がその教會に何をも加へず、何をも取り去らない。福音さへ宣傳へられ、之が信ぜらるゝならば、よし麥と燕麥とが混つて居ようともそこに眞の教會があるのである。またカルヴィンは教會を單に赦罪の爲のみならず、潔めの爲の組織と考へてゐた。教會は救に與かるものゝ團體であるばかりでなく、神の榮光の爲に存する選ばれたる團體である。キリストの教會は特別な超自然的恩寵によつて造られた團體であるのみでなく、此世界とその中にある凡てのもの、家庭、學校、社會、國家を神の支配のもとに置き、此等のものをして神意を

實現せしむるために存する團體である。換言すれば超自然的團體としての教會は自然的團體に對して嚴かなる責任と使命とを有するのである。神はとくに選ばれたる團體に特別なる恩寵を與へ一般人類に普通の恩寵を與へ、前者によつて後者を潔め高めんとせらるゝ。教會の一般文化に對する責任と使命とを高調するところにカルヴィンの教會觀の特色がある。

最後に カルヴィニズムの永遠の意義とも見らるべきものにつき一言する。哲學も、汎神論も、神秘主義も決して活ける神の客觀的な確さを與へ得るものではない。ことにマルキシズムに風靡せられてゐる唯物的な無神論的な現代文明の中にあつて、活ける神、天地の創造主にして、贖罪主なる神、聖なるめぐみある意志として神を確かに認識し、體驗せしむるものはカルヴィニズムであると思ふ。凡てはよし空とするとも、天地をつらぬき、之を支配し、之を遠大なる經綸によつて進めゆく永遠なる神はいく。聖なるめぐみある實在としての神をカルヴィニズムほどたしかに與ふるものはない。そして人はただ神の榮光のために生くべきものである。神は人のためにあるのではなく、人こそ神のために存する。享樂的な功利的な動機から、若くは審美的感情の満足か

ら神を求めんとする宗教、即ち神に於て自己を求めんとする宗教に對して、カルヴィンは神のために神を求めんとする良心宗教を力強く教へんとする。神への畏敬と此世への責任、自己のために何をも求めず、神の爲に凡てを求めんとする謙虛にして勇敢なるヘロイズム、こゝにカルヴィンの敬虔の特色がある。いつもカルヴィニズムは偶像破壊の精神としていき、凡てのものを神の榮光の爲に贏ち得んとする。次にまたカルヴィンは宗教は宗教、文化は文化とばらばらに考ふることを肯んじない。神は天地の創造主、活ける神なるがゆゑに、凡てのものはその聖なる支配のもとに立つべきである。教會は勿論家庭も學校も社會も國家も、教育、政治、經濟みな神の支配のもとに立ち、その榮光のために存すべきである。換言すればハンターの所謂『宗教によれる全人生の倫理化』を徹底的になさしむるところに、カルヴィニズムの力がある。そして猛烈に實生活に道徳化する力は、自己のうちからは來ず、全くキリストとその十字架を信する信仰より來るのである。キリストに於ける豫定の惠の深さから、信仰生活の道徳化の力は來る。恩寵が召命となつて必然に生きてくる。そしてその倫理化の内容は聖書に於ける神の律法及び一般の自然律が

與へてくれる、こゝに福音と律法との一致がある。またカルヴィニズムは宗教の團體的表現を重んずる。キリストはまづ選ばれたる團體の爲に十字架にかゝられた。個々の信者の集合が教會でなく、選ばれたる團體が先であつて、この中に入れらるゝことにより人は救はれるのである。カルヴィンにとつては團體なしには宗教はあり得ない。我等は聖なる團體に於てよく神を見出し得る。そしてキリスト教會は特別恩寵の團體として、他の普通恩寵のうちにある一般文化團體に對して責任と使命とを有ち、此等を神の榮光の爲に生かさしむるのである。カルヴィニズムは最もソリダリティーの觀念を與へ、各個人は全體のため、全體は各個人のため、各個人は他の個人のために生くべきものなるを教へる。こゝに宗教的社會主義の原則がひそんでゐる。宗教的社會主義研究に志あるものは、是非カルヴィニズムに心を用ふべきだと思ふ。要するに無神論的、唯物主義的精神の渦巻く現代、人間中心なる主觀的、享樂的功利的精神の支配する現代のたゞ中であつて、徹底したる有神的、客觀的世界觀と人生觀とを與へ得るカルヴィニズムは大に顧慮せらるべきだと信ずるものである。(完)

カ ル ヴ ィ ニ ム

昭和六年四月二十五日 印刷
昭和六年四月二十八日 發行定價貳拾五錢
送料四錢

著者 東京市外淀橋柏木九四八番地 高倉徳太郎

發行者 長野縣下伊那郡上郷村下黒田五九番地 福元利之助

印刷者 長野縣下伊那郡上飯田町四五五六番地 原田増藏

印刷所 長野縣下伊那郡上飯田町四五六二ノ三番地 研究社印刷部

發行所 長野縣上郷村下黒田五九番地 改革社

振替長野六四二一(福元利之助)

終

